



海士町で学んだこと：
「地域をともにつくる」教師を目指す2名の学生たちによる「越境的な学び」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 真子, 鈴木, 真歩, 宮前, 耕史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000210

海士町で学んだこと - 「地域をともにつくる」教師を目指す2名の学生たちによる「越境的な学び」 -

山田真子¹・鈴木真歩¹・宮前耕史²

¹北海道教育大学釧路校地域文化研究室3年

²北海道教育大学釧路校地域環境教育実践分野

What We Learn in Ama Town

- "Cross Border Learning" by Two Students Aiming to Become Community-Based Teachers -

YAMADA Mako¹, SUZUKI Maho¹, and MIYAMAE Yasufumi²

¹Hokkaido University of Education, Laboratory of Regional Culture,

²Hokkaido University of Education, Environmental and Regional Education

はじめに.

令和5年2月27日～3月2日、3泊4日の日程で、北海道教育大学釧路校地域文化研究室の学生・山田真子（静岡県出身）と鈴木真歩（岩手県出身）の2名が「教育魅力化プロジェクト」で全国的に著名な鳥根県隠岐郡海士町で自主研修を行った（研修当時は2年生）。後日、海士町での学びを他の学生やその他関係者とも共有するため、山田真子の主宰する研究会（「ゆるい会」）で報告会を行った（令和5年4月30日（日）19時00分～20時00分@オンライン）⁽¹⁾。本稿は、当日の山田・鈴木による報告を文字化したものである（【図1】）。

報告会では、研修のきっかけや4日間の滞在日程、印象に残った話や取り組み、そこから得た学びや、今後の展望等といった事柄について報告を行った。報告会には研修を受け入れていただいた海士町役場・豊田庄吾氏や、町内小学校に勤務する教職員を含め、大学生等24名の参加があった（宮前）。

1. 自己紹介および海士町研修のきっかけ

（山田）私が海士町に行きたいと思ったきっかけは、地域文化研究室のゼミで、海士町や隠岐島前高校といったワードをよく耳にしていたからです。実際にどんな活動をしているのか、どんな町なのか、活動に携わる人たちはどんな

⁽¹⁾「ゆるい会」とは、全国からいろいろな大学生を集めて、将来のことややってみたいこと、興味のあることについて、教育やまちづくりといった大きなカテゴリーを軸にゆるく話をする会である。「ゆるさ」をモットーに気を張らずにゆったりとしたおしゃべり会などを通して、大学生同士の定期的な繋がりをつくる場として活動している。

人がいて、どんな想いを持って活動しているのかとても気になりました。これらのことについて現地に行って勉強したいと思い、海士町へうかがいました（【図2】）。

（鈴木）私が海士町へ行った理由は三つあります。一つ目は、同じ研究室の山田真子さんが誘ってくれたこと。「せっかく誘ってくれたんだし、なんか楽しそうなので大冒険してみよう」と思い、行くことを決めました。

二つ目は、自分の中の引き出しや人とのつながりを増やしたかったということ。私は将来地元の岩手県で小学校教師として働きたいと思っています。子どもたちのワクワクを引き出し、伴走できるような教師になりたい。そのためには、まず自分自身の中身や経験を豊かにしたいと思いました。

そして三つ目は、学校と地域がともにつくる海士町の人づくりや地域づくりの取り組みを、自分の目で見て学びたかったということ。海士町の取り組みについては大学1年生の頃から耳にしていた興味がありました。それを自分自身の五感を使って学びたいと思いました。

2. 海士町での4日間

（山田）海士町には、2月27日から3月2日まで、4日間滞在しました。1日目には、全国から集まってきていた様々なバックグラウンドを持つアツイ大学生たちとじっくり話をしました。2日目には、海士町を探検したり、隠岐國学習センターで、原周右さんや塚越優さんから、隠岐島前高校での取り組みや、夢探究、学校におけるICT活用、学習センターの施設、高校魅力化コーディネーターの仕事や役割について等のお話をうかがったりしました（【図3】）。

他にも、小・中学校のコーディネーターの仕事や「子ど



【図1】海士町で学んだこと



【図2】自己紹介&どうして海士町へ？



【図3】海士町でどんなことをしていたの？



【図4】おやすみ前のアウトプット会



【図5】島まるごと図書館①



も議会」のお話を伺ったり、「あまマーレ」で地域の方と触れ合ったり、海士町役場の豊田庄吾さんのお話をじっくりうかがったり、とても濃密な、学びの多い4日間でした。

3. 真歩・真子「おやすみ前のアウトプット会」

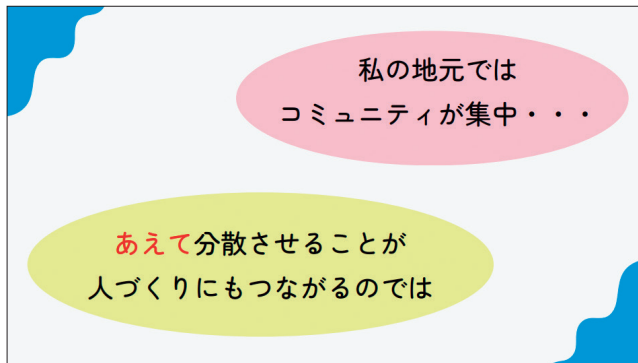
(鈴木) 海士町では毎日様々な方と出会い、たくさんのことを学びました。日中にインプットしたことを寝る前に二人でアウトプットし、学んだことや考えたことを共有したり、改めて自分事として考え直したりしました。昼間のインプットの時間ももちろん楽しかったですが、「おやすみ前のアウトプット会」も大変楽しいものでした。その日に聞いたり学んだりしたことをアウトプットしていく中で、さらに学びたいことが出てきたり、海士町での活動を、釧路や自分たちの地元だったらどうするかと、考えを広げたりすることができました(【図4】)。

4. 鈴木真歩の学び

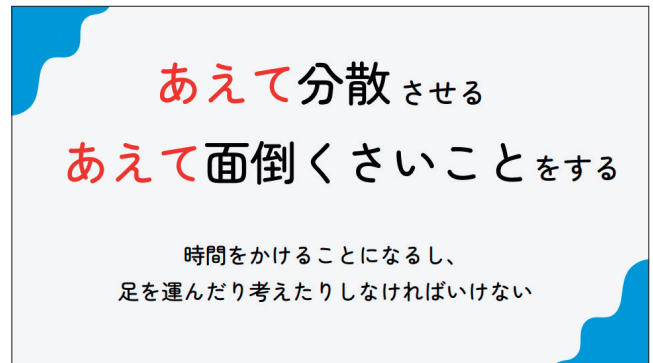
(1)「便利」は本当に良いことなのか？

(鈴木) 海士町で学んだことや驚いたことはたくさんありましたが、最初に驚いたことは、島の様々な施設に図書館の本があったことです。これは「島まるごと図書館」という、海士町の興味深い取り組みの一つです。人が集まる場所を図書館分館としてネットワーク化し、島全体を一つの図書館とする構想で、公民館や港、診療所、飲食店など、島のあらゆる場所で本を借りて読むことができます(【図5】)。例えば、飲食店では食に関する本が置かれていたり、母親世代が多く集まる場所では、音楽や料理、編み物などに関する本が置かれていたりします(【図6】)。

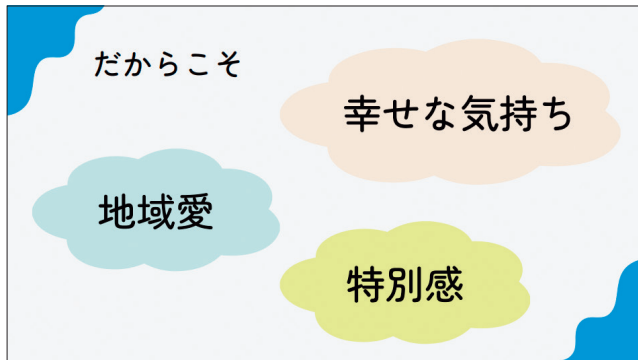
私の地元では、いろいろな施設が一つの地域に集中しがちです。たしかに施設が一か所に集中するということは、そこで全てのことを済ませることができるという便利さがあります。しかし私は、この海士町の「島まるごと図書館」



【図7】施設の集中と分散①



【図8】施設の集中と分散②



【図9】施設の集中と分散②



【図10】あまマーレ①



【図11】あまマーレ②



【図12】あまマーレ③

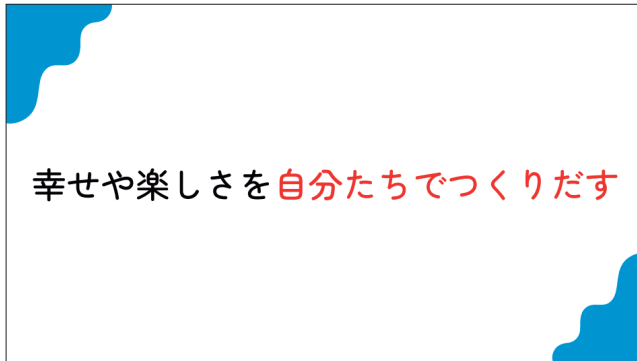
の発想から、本を地域の様々な場所へ分散させるというように、集中させるのではなく、あえて分散させることが人と人との交流やつながり、地域の人々の幸せな気持ちを生むというように、あえて分散させることが人づくりにもつながるのではないかと考えました（【図7】）。

あえて分散させたり、あえて面倒なことをするということは、時間をかけることになるし、足を運んだり考えたりしなければいけない（【図8】）。しかしこのような「あえて」の逆転的な発想の取り組みは、地域の人々の幸せな気持ちや特別感、地域愛を育むことにつながるのでないかと思えます。例えば、地域の中央の図書館ではなく、あえて飲食店に料理や食に関する本を置くことで、本が人と人がつながるツールの一つとなり、新たな人とのつながりや学びが生まれるのではないかと。また、〇〇な本が読みたいから地域の〇〇に行ってみようなど、地域を知ったり、地域愛が育まれるきっかけの一つにもなったりするのではないかと考えました（【図9】）。

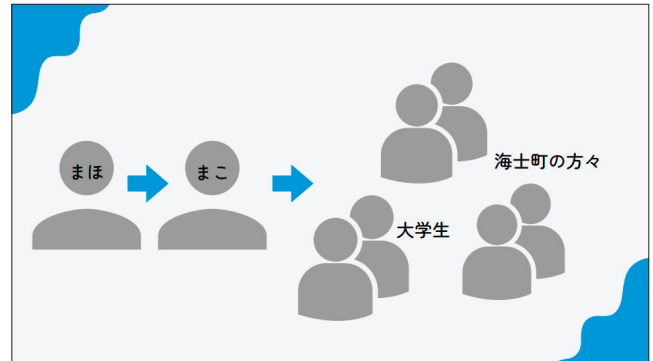
今の世の中、効率化や便利さが求められることが多くなっているように思います。その方が良い場面もたしかにあります。でも、何の疑問を抱かずにそういった方向に進んではいけないと思いました。「あえて分散させる」という逆転的な発想のように、不便利さから生まれる良さがあることを忘れず、今ある当たり前をもう一度捉え直しながら過ごしていきたいと思いました。

（2）「ないものはない」

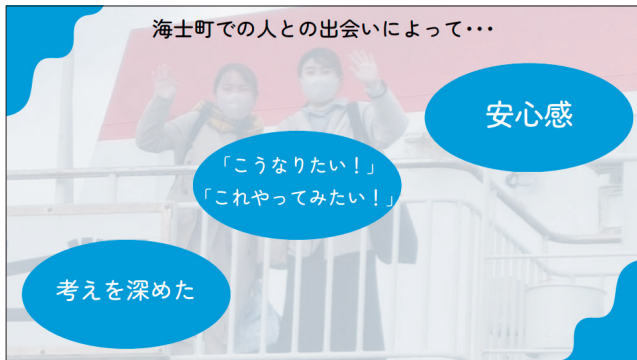
海士町には、いつでも自由に誰もが遊びに来られる「あまマーレ」というコミュニティ・スペースがあります（【図10】）。「あまマーレ」には子どもたちが自由に安心して遊べるような子ども部屋があったり、セルフカフェがあったり、古道具屋さんがあったりと、様々な居場所が存在しています（【図11】【図12】）。私はこの「あまマーレ」を、趣味の時間を共有したりつくり出したり、みんなで団らんできる素敵な「居場所」と感じました。海士町には大型



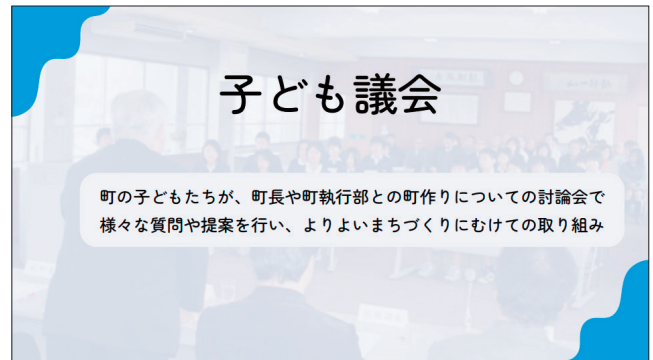
【図13】自分たちで作り出す幸せや楽しさ



【図14】人と人とのつながり



【図15】海士町で生まれたつながり



【図16】子ども議会

ショッピング・センターやコンビニエンス・ストアはないし、ボーリング場や遊園地などありません。でも、そういったものがないからこそ、自分たちで幸せや楽しさを作り出しているように思いました（【図13】）。

「ないものはない」という言葉を教えていただきました。この言葉には二つの意味が込められています。一つは、「島にないものはないのだから仕方がない」という意味です。もう一つは、「ないなら自分たちでつくれば良い。つくればなんでもある。島にないものなんて一つもない。全てある」という意味です。

自分たちで作り出す幸せや楽しさは、地域の人にとって、一時的なものではなく、持続的な幸福や豊かさにつながるのではないかと思いました。また、自分たちで作り出す過程で、周りの人と協力する大切さや思いやる気持ちに気付いたり、埋もれていた地域の魅力や身近な人の素敵な部分に気付いたりするのではないかと思いました。

自分のまわりの人や様々な考えを受け入れることができるようになった時、自信がついて、自己肯定感も高まるのではないのでしょうか。自分たちで作り出すことで、地域を好きに、そして自分自身も好きになるのではないのでしょうか。

(3) 人とのつながり

海士町での冒険で、私は人とのつながりを増やすことができました。山田真子さんの誘いを受けて冒険が始まって、海士町の様々な方々や、他大学の学生ともつながることができました。人と出会い、そしてつながることによ

て、考えを深めることができ、また「こうなりたい、これやってみたい」と次へのステップを考えるきっかけにもなりました（【図14】）。

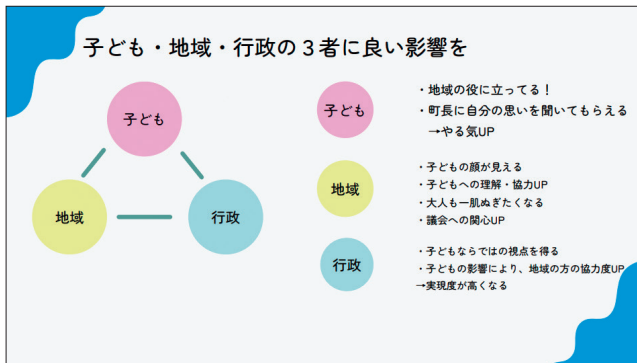
また、自分が困った時や何か相談したいことがあった時に話したり相談できたりする人が増え、安心感が生まれました。これからも今ある人とのつながりを大切にしながら、またさらに広げていきたいと考えています（【図15】）。

5. 山田真子の学び

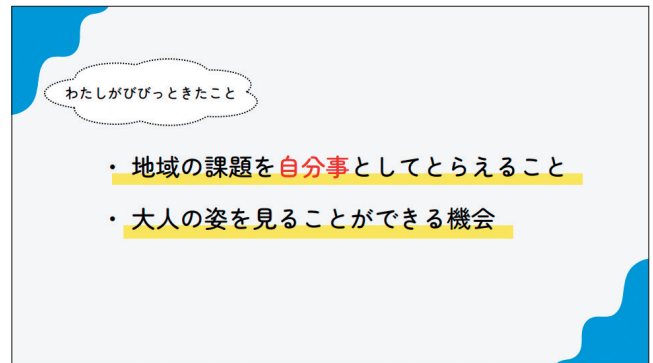
(1) 子ども議会

(山田)「子ども議会」とは、子どもたちが地域の方へのインタビューなどを通して町の課題を見つけ、そこから町長にむけて様々な提案や質問をするといった、より良いまちづくりに向けた取り組みの一つです（【図16】）。「子ども議会」の特徴として、子ども、地域、行政の三者に良い影響をもたらすということを挙げることができます。

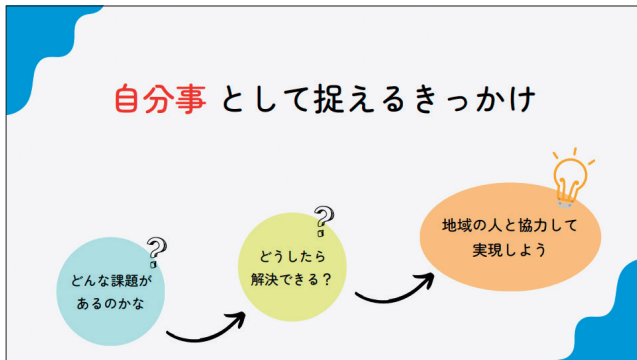
子どもにとっては、自身で調査し、提案したいことを町長に直接聞いてもらえることで、地域の役に立っていると実感し、また活動に対するやる気も上がります。地域にとっては、活動を通して子どもの顔が見えることで、子どもたちへの理解も進み協力にも積極的になります。また、子どもたちの取り組む姿を見ることで、大人たちの地域に対する関心度が高まり、地域のために何かしたいと感じるようになります。行政にとっては、子ども視点での意見を得ることができます。また、子どもたちの影響で、地域の方の



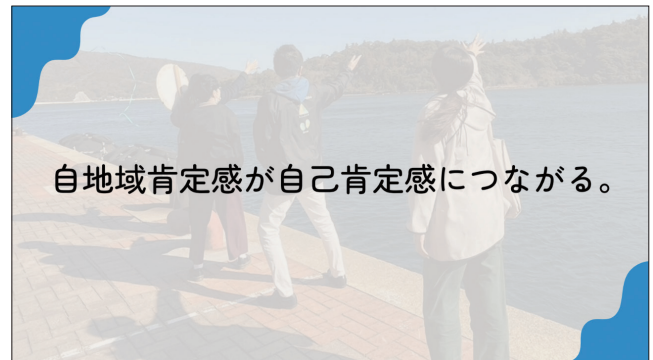
【図17】子ども議会の三者への影響



【図18】「子ども議会」で関心を持ったこと



【図19】課題を自分事としてとらえる



【図20】自地域肯定感が自己肯定感につながる

協力も得やすくなり、実現度が高くなります（【図17】）。

「子ども議会」の取り組みの話聞いて、関心を持った点が二つあります。一つ目は、子どもたちが地域の課題を自分事として捉えることができるようになることです。二つ目は、子どもたちが地域の大人の姿を見ることが出来る機会になることです（【図18】）。

私は静岡県出身で、大学進学とともに北海道に来ました。地元・静岡にいた時は、「地元には何もない」と思っていました。しかし、地元を離れて改めて地元を見つめてみると、ランドマークのような遊園地や大きなショッピングモールが無くとも、そこには人や自然といった豊かな資源がたくさんあることに気がきました。

地域の商店街を守る大人、伝統文化を守る大人、地元を盛り上げようと精力的に活動をする大人など、「地元を知る」ことは非常に重要であることを身をもって感じました。「子ども議会」を通して、子どもたちは自然と地域の大人と地域について知る機会が用意されており、小学校段階から「地域を知る」ことができるこの活動に非常に価値を感じました。

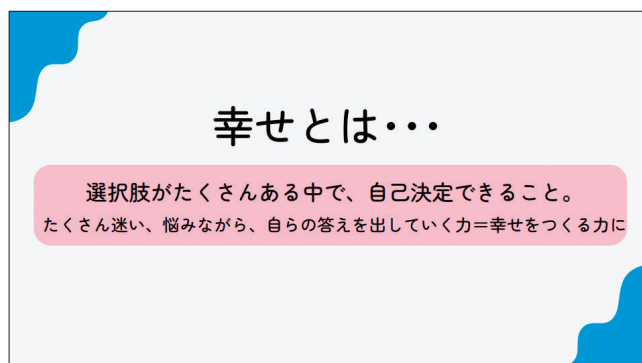
また、SDGsに代表されるように、現在、世界中に解決しなければならない課題が溢れています。しかしながら、私がそうした課題を自分事としてとらえられているかというと、決してそうではありません。しかし、「子ども議会」のように、課題を地域に落とし込み、身近な課題に気づき、解決方法を考え、実践するというプロセスを踏むことで、課題を自分事として捉えることができるのではないかと考えました（【図19】）。

「自地域肯定感が自己肯定感につながる」というとても印象的な言葉に出会いました（【図20】）。「子ども議会」には、地域の多くの大人と関わる機会がたくさん設けられています。この活動を通して、子どもたちは、地域に自分たちのために本気で取り組む大人がいることに気がきます。このような大人がたくさんいる地域は魅力的であり、その地域に住んでいる自分もすごいんだと気がきます。「子ども議会」を通して、このような効果も期待できます。地域を知るきっかけともなり、また魅力的な大人に出会う機会ともなる「子ども議会」にとっても興味を持ちました。地元に戻った際には、この「子ども議会」を自分でも実践してみたいと思いました。

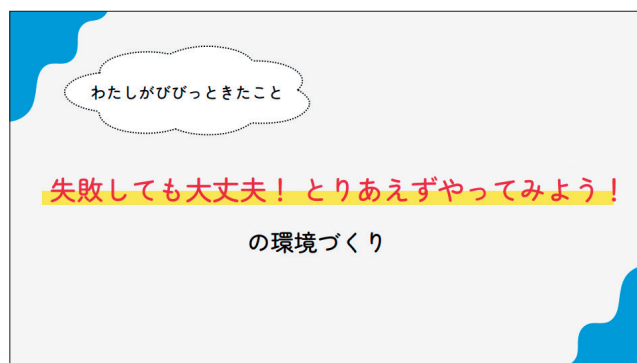
（2）幸せをつくる力

海士町役場の豊田庄吾さんに、「幸せとは、選択肢がたくさんある中で、自己決定できることである。多くの選択肢を前にたくさん迷い、悩みながら自らの答えを出していく力がいずれ幸せをつくる力へとつながる」と教えていただきました（【図21】）。この言葉を聞いた時、「自ら選ぶ力」という言葉が刺さりました。私は、多様な選択肢の中で何かを選ぶことが非常に苦手です。選択したことが間違っていたら怖いと考えてしまうことが大きな原因だと思います（【図22】）。

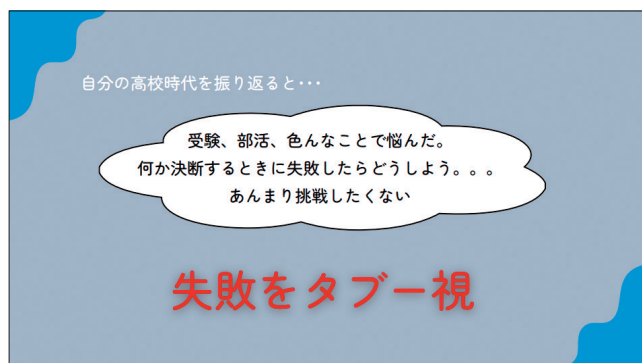
「失敗しても大丈夫！とりあえずやってみよう！」といった場や雰囲気があったり、そう言ってくれる人が周りにいたりするだけで、何かを選ぶときに少し背中を押されるように思います。高校時代を振り返ると、受験、部活、人間



【図 21】 幸せとは・・・



【図 22】 「失敗しても大丈夫」の環境づくり



【図 23】 失敗のタブー視



【図 24】 「失敗の日」

関係等、様々なことで悩みました。進路等、何か決断をする際に「もし失敗したら…」という考えが頭をよぎり、挑戦することを避けていたように思います。「失敗をタブー視」してしまっていたのだと思います（【図23】）。

このような中で、海士町で魅力的な取り組みに出会いました。隠岐島前高校の「失敗の日」です。「失敗の日」では、失敗にまつわる様々なプログラムを通して、一日中、生徒と先生、スタッフ全員が失敗に向き合い、オープンに語ります。そして、最終的にその失敗を受け止め、未来への踏み込みを考えるワークショップを通して、次へのステップを考えます（【図24】）。

この「失敗の日」の取り組みのお話をうかがって、失敗を受け止めてくれる大人がたくさんいることは、何かに挑戦するときの安心材料になるのではないかと考えました。この「失敗の日」のように、自らの選択や挑戦を応援したり、失敗しても安心して戻って来ることができる雰囲気や土壌があったりすることが重要だと感じました。自分自身の過去も生かしながら、このような取り組みを実践していきたいと強く感じました。まずはこの「失敗の日」を、自身の運営する教育系の大学生コミュニティである「ゆるい会」で行ってみたいと考えています（【図25】）。

6. これから宣言

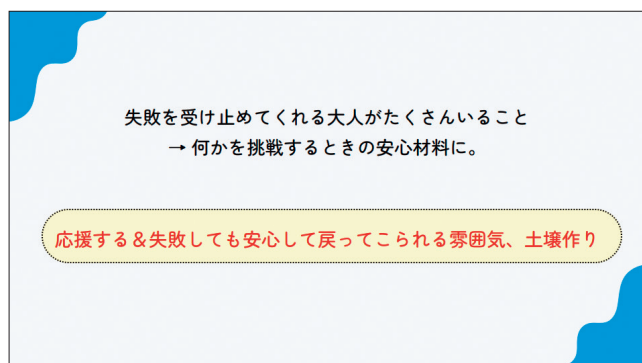
（山田）海士町での学びを通して、これからやろうとしていること、やってみたいことを宣言します。

地元のことを知り、積極的に関わっていきます。また、

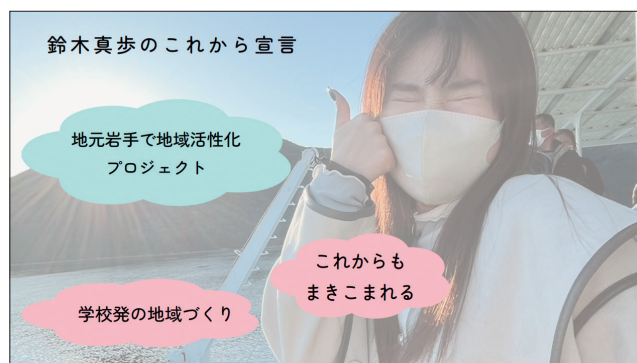
「失敗の日」を実施したいと思っています。「子ども議会」の話聞いて、自分の地元のことについてもっと知りたいという気持ちが高まりました。まだ自分の知らない魅力的な大人に出会ってみたいとも思いました。なので、もっと積極的に、地元の人と関わっていきたくて考えています。また、隠岐島前高校の「失敗の日」の取り組みを知り、実際に「ゆるい会」で実施してみたいと思いました。大学生のコミュニティの中で、自分の失敗に向き合い、考え、次のステップへと踏み出す機会を作っていきたいと考えています（【図26】）。

将来の希望としては、社会教育コーディネーターとして、子どもたちのワクワクを生み出す場作りをしていきたいと考えています。海士町には、子どもたちのワクワク心をくすぐるような取り組みがたくさん用意されていました。子どもたちが地域の豊かな環境や資源に出会う機会をたくさん作り、自分自身もワクワクしながら、子どもたち、またその周りの大人たちもワクワクする、ワクワクしたいという気持ちを生み出すような場を作っていきたいと考えています。

（鈴木）地元岩手県で地域活性化プロジェクトに取り組みます。実はこれも、友だちからの誘いを受けて取り組むことを決めました。海士町で学んだことや大学で学んでいることを、今度は自分の地元で活かしつつ、自分らしく活動しながら地域の魅力を再発見したいと考えています。将来地元の岩手県で小学校教師として働く時に、子どもたちが地域の素晴らしさや、身近な人や自分自身の素敵な部分に気付けるような授業づくりをしたいと思っています。その



【図 25】安心の土壌づくり



【図 26】これから宣言（鈴木真歩）



【図 27】これから宣言（山田真子）



【図 28】ありがとうございました。

ためにはまず私自身が岩手県をもっと知り、そして岩手県での活動に巻き込まれ、地域をつくる一人になる必要があらと思います（【図27】）。

これからも様々な活動に巻き込まれ続けたいと考えています。このことで、自分自身の引き出しを増やすとともに、引き出しの中身を濃くしていきたい。今回海士町に行ってみて、たくさんのことを学んだり、考えたりすることができました。また、自分自身を見つめ直すこともできました。私の強みは、何でもやってみる、巻き込まれてみるという素直でクリアな心をもっていることだと、この海士町での冒険を通じて感じました。この強みを活かしながら、今後も様々な取り組みや人たちに巻き込まれていきたいと考えています。

また「学校発の地域づくり」について、もっと学んでいきたいと考えています。教師とコーディネーターとの具体的な関わりや、学校を地域づくりや人づくりの手段として実際にどう使うのか、そのための具体的な指導のあり方について等、私自身が今後行っていく活動と大学での学びを関連づけて考えていきたいと思っています。

今回の海士町訪問で、海士町役場の豊田庄吾さんをはじめ、海士町の多くの方々にお世話になり、助けていただき、支援していただきました。改めて御礼申し上げます。ありがとうございました（【図28】）。

【付記】

本稿は、「持続可能な地域・社会・未来をともにつくる

学び」(=「地域をともにつくる学び」)をつくる学校教師(教育人材)を目指す、2名の学生による「越境体験」「越境的な学び」の記録であり、報告である。

学習指導要領の歴史上、はじめて序文を設けてまで確認されたことは、学校(教育)とは、それそのものが「目的」であるわけではなく、何か目的を達成するための「手段」であって、その目的こそが、持続可能な地域・社会・未来の創り手をつくるということ、すなわち、学校とは、持続可能な地域・社会・未来の創り手をつくる場であり、制度であるということであった(平成29・30・31年改訂小・中・高等学校学習指導要領)。

何を今さら当たり前のことをと思われるかもしれない。しかし、そうした「当たり前」を改めて確認しなければならないまでに、学校(教育)そのものが「目的」となっていた、つまり学校(教育)は社会に「閉じた」ものとなっていたということであろう。だが、その責任を教師個人に帰してしまうのは酷である。ここには、教師を養成する教員養成課程そのものが社会に「閉じた」ものとなっているという構造的欠陥がある。

状況論・実践コミュニティ論の立場から言えば、学習とはアイデンティティの形成である。アイデンティティの形成のためには、特定の専門領域に熟達化していく「垂直的な学び」とともに、その専門性そのものを専門領域の外側から再定義していく「水平的な学び」が必要である。そして、そこには「越境体験」「越境的な学び」が不可欠である〔石山・伊達2022〕〔香川・青山2015〕。

だが、教師が教育専門職としてのアイデンティティを形

成し、専門性を深めていく教員養成の公的なプロセスには、「水平的な学び」に対する視点が決定的に欠如している。そして、これが学校における学習の「カプセル化」を招来している〔ENGESTRÖM, Y. 1991〕〔山住2004〕〔山住2019〕。教員養成の高度化（教職の高度化）が、皮肉なことに「学校（学習）カプセル」のいわば「硬度化」を招来しているのである。

ユーリア・エンゲストロームは、「人々は自らの周りの状況を変えることによって」、「自分たち自身を変え」ていくことができると述べ、そうした学習のあり方やそのプロセスを「拡張的学習」と呼んだ〔エンゲストローム, Y. 1999, p. i〕。いうなれば、人間は、自分がワクワクできる環境を自分で作り出すことで、ワクワクできる自分をつくっていくことができる。そして、自分がワクワクできる環境を自分で「拡張」していくことで、ワクワクできる自分自身も「拡張」していくことができるということであろう。だが、そのためには自らの「拡張」を目指し、既存の環境の殻を突き破る「越境」が必要となる。この「越境」による「拡張的学習」への主体性・能動性をこそエージェンシー（＝「学びに向かう力」）と呼ぶのであるが〔OECD Future of Education and Skills 2030 Project 2020〕、そこには痛みや苦痛がともなう。

子どもたちが将来ワクワクしなければならないのは、「学校の中」ではなく「学校の外」（＝地域・社会・世界等）である。であれば、なぜ子どもたちを「学校の中」へと閉じ込めておく必要があると言えるのか。コミュニティ・スクールや「社会に開かれた教育課程」、地域学校協働活動といった学校と地域の連携・協働をうながす仕組みや仕掛けは、いわば「学校の中」と「学校の外」の世界とを架橋し、子どもたちを「学校の外」へと「越境」させていくための工夫であろう。だが、教師たちがこうした仕組みや仕掛けの意義を正しく理解し、それを利用して子どもたちを「学校の外」の世界へと「越境」させていくためには、教師自身こそが、その価値を体験を通じて実感的に理解している必要がある。

報告を行った2名の学生の「越境」先である鳥根県隠岐郡海士町は、いわゆる高校魅力化（教育魅力化）の発祥の地であり、「持続可能な地域・社会・未来をともにつくる学びをつくる」（「地域をともにつくる学びをつくる」）を地で行く先進事例中の先進事例である〔山内・岩本・田中2015〕。そこでの学生たちの学びは本報告に述べられている通りであるが、仮に上記のような「越境」による「拡張的学習」への主体性・能動性をエージェンシーと呼ぶならば、「越境」を通じて、彼らはまた彼ら自身のエージェンシーそのものをも「拡張」しているということができるのではなかろうか（宮前）。

【参考文献】

- ・ ENGESTRÖM, YRJÖ 1991 “NON SCOLAE SED VITAE DISCIMUS: TOWARD OVERCOMING THE ENCAPSULATION OF SCHOOL LEARNING” *Learning and Instruction*, Vol.1, pp.243-259.
- ・ エンゲストローム, Y. 1999（山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登 訳）『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社。
- ・ 石山恒貴・伊達洋駆2022『越境学習入門』日本能率協会マネジメントセンター。
- ・ 香川秀太・青山征彦2015『越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』新曜社。
- ・ 山内道雄・岩本悠・田中輝美2015『未来を変えた島の学校』岩波書店。
- ・ OECD Future of Education and Skills 2030 Project 2020「2030年に向けた生徒エージェンシー」（Student Agency for 2030 仮訳（https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf）2024年1月15日確認）
- ・ 山住勝広2004『活動理論と教育実践の創造—拡張的学習へ』関西大学出版部。
- ・ 山住勝広2019「学校における子どもたちの拡張的学習の生成—学習活動を創り出すエージェンシーの発達に向けて—」活動理論学会『活動理論研究』第4号。